

吉備国際大学研究紀要

(人文・社会科学系)

第23号, 1-10, 2013

「個の確立」教育とサービスラーニング

米良 重徳

Education Oriented toward the “Establishment of the Individual” and Service Learning

Shigenori MERA

Abstract

This is the 7th short thesis to survey the “Establishment of the Individual”, having brought me to the epilogue. Taking up the service learning as a methodology of education in order to establish the individual, I introduced my own programs as well, which are now employed at our university. Simply put, the service learning is to learn through the experience of service (social service activities). In Europe and the U.S., where non-profit organizations, etc. are playing active roles to harness students, and such activities have become a part of their lives, it is a very ordinary educational method which is recognized as extremely effective. In Japan, however, because of its public recognition yet to be gained, it is rightly said that the majority of schools are reluctant to adopt the method in their curricula. Despite all that, over the past several years, the number of schools which adopted the method has surely increased, so the term of the “service learning” has been catching on. This is due to the fact that the number of NPO's which take care of students has sharply increased over the past decade, proving that the methodology is highly effective on education in Japan as well.

As a summary of this thesis, I made a few remarks on correlation between the service learning and education oriented toward the “Establishment of the Individual”, in the hope that more and even more schools will adopt the service learning, which enables the Japanese, especially the youth to advance in pursuit of the “Establishment of the Individual”.

Key words : Establishment of the Individual, Service Learning, NPO, Independence, Autonomy, Respect of the Individual

キーワード : 個の確立, サービスラーニング, NPO, 自立, 自律, 個の尊重

はじめに

私は「個の確立」という概念を用いて、いわゆる

市民社会の担い手とは誰か、どうあるべきかを研究課題としている。すなわち市民社会の担い手は個が確立されていることが大前提であるが、では確立さ

吉備国際大学保健医療福祉学部社会福祉学科
〒716-8508 岡山県高梁市伊賀町8

*School of Health Science and Social Welfare, Department of Social Welfare, KIBI International University
8, Iga-machi, Takahashi, Okayama, Japan (716-8508)*

れている個とはどういう個であるか、そのような個にするためにはどのような教育が必要かという問いを持っている。今まで『市民社会を担う「個の確立」概観』、『ヨーロッパ近代市民社会形成過程における「個のめざめ」』、『アメリカ合衆国の発展にみる「個の確立」』、『ジョン・デューイと「個の確立」教育』、『NPO運動と「個の確立」』というテーマで「個の確立」に関する小論を発表してきた。今回の小論はその最終章として、私が本学で取り組んでいるサービslラーニングをテーマとして取り上げた。NPOやNGOが活発に活動し、地域社会において社会的サービスの重要な担い手になっている北米やヨーロッパでは学校のカリキュラムの中にサービslラーニングがしっかりと位置づけられている。サービslラーニングの教育効果が学校教育関係者に認識されているからである。

それに比べると日本ではサービslラーニングはまだ未開拓の分野で、これに取り組む学校も少ない。なにしろそもそも地域社会でその受け皿となるNPOやNGOの働きがまだまだ弱いのである。欧米では市民革命を経て、19世紀半ば頃から各地に自発的な組織が次々に設立されるアソシエーション革命を経験するなどNPOやNGOの歴史は長いが、日本がNPO運動に本格的に取り組み出したのは特定非営利活動促進法（通称NPO法）が施行された1998年12月以降でつい最近のことである。歴史的な重みがあまりに違うので、欧米と日本におけるNPO運動の状況は比較にならないほどであるが、しかしここ日本でもサービslラーニングに関するうねりが起き始めていることも見逃すことのできない事実である。2002年度より小学校・中学校において導入された「総合的な学習」はそのはしりである。また中学校や高校で積極的に活用されているボランティア学習もその流れに沿ったものである。大学でも本学のように2006年度から「ボランティア活動演習」という科目名でサービslラーニングに取り組み出したの

は早い方であるが、現在ではその数が徐々にではあるが増えつつある。内容をどのように規定するかという問題はあるものの、おそらく100に近い大学がサービslラーニングに取り組んでいると推測される。教育効果については欧米で実証済みであるので、今後日本でもその受け皿となるNPOやNGOが発展・成長するにつれてサービslラーニングの取り組みが活発になることは間違いのないものと確信している。この小論によってサービslラーニングの意義が明らかになり、より多くの大学で導入されることになればうれしい限りである。

第1章 「個の確立」教育

第1節 「個の確立」教育における目指すべき人間像

「個の確立」教育における目指すべき人間像を3つのキーワードを基に述べてみたい。まず第1に個が確立された人間は「自立」している人間である。経済的にも精神的にも「自立」している人間のことである。経済的「自立」とは言うまでもなく自分自身が生きる糧を自力で手に入れることができるということである。他の人から経済的な援助を受けると、どうしてもその人の言いなりになったり、従わざるを得ないことが出てくるのは世の常である。誰からも束縛されることなくわが道を進むことができることは「自立」の大前提である。個を確立させるためには精神的な「自立」も欠くことのできない要素である。子どもが親離れしていく過程を精神的に自立していくと言うが、子どもは親とは別人格であることを必ずどこかで主張するようになる。同じように私たちも唯一の存在であり、私たち自身の意見や考えを持っているのであり、他の人の意見や考えに依存したり、惑わされることがあってはならない。

第2に個が確立された人間は「自律」を大切に考

える人間である。「自律」とはまさしく自分を律するということであり、2つの方面から考えることができる。まずは消極的な意味から考えると、してはいけないことをしないという決意である。法律的にはもちろんのことであるが、道義的にもしない方がよいことはしないということである。世の中には様々な誘惑があつて、よほど個がしっかりとしないと、この誘惑に打ち勝つことが意外と至難の業であることはよく知られていることである。積極的な「自律」はより重要なことである。良いと思ったことを進んでやろうとする心構えのことである。良心に沿った行動と言うこともできる。特に私たち日本人は自分が良いと思ったことでも、周りの人たちがどう思うかということに気を配り、その行動を自重する傾向がある。世間体を気にする日本人独特のメンタリティーが積極的な「自律」を育てる阻害要因になっていることがあるようにも思える。もちろん他の人に迷惑をかけることは論外であるが、少なくとも一歩踏み出してまずは問題提起ぐらいからは動き出したいものである。

第3のキーワードは「個の尊重」である。個が確立された人間は個を尊重するのである。まずは自分という個を尊重する。自分の思いを大切にし、その思いを実現するために自ら進んで自発的に主体的に回りの障害を取り除き、必要なものを創り出そうとする心構えである。何事もまずは自分という個からしか始まらないという認識が必要である。そしてさらに重要なことは他の人の個を尊重することである。他の人も自分と同じくその人独自の思いを持っており、その思いを我が身に受け止めて、願わくばかなえてやりたいと思うことである。また、思いだけではなく、当然その人なりの意見や考えを持っているので、それらを尊重しつつ自分の意見や考えと交流させて、さらに良いものを創りだすことができるばなお良い。人間は社会的な動物と言われているように、必然的に他の人々と共に生きていく

のであるから、他の人をどう受け入れるかは決定的に大事なことである。

第2節 ジョン・デューイと進歩主義教育

私は先の論文『ジョン・デューイと「個の確立」教育』（2010年3月）において「個の確立」教育に貢献したものとしてジョン・デューイと進歩主義教育を紹介した。その記述によると、新教育運動の指導理念は、その指導者の理想によって、またそれに対応する社会的事情により、多少のニュアンスの違いがみられるが、およそつぎのような概念に包括される。①児童中心主義、②全人主義、③活動主義、④労作主義、⑤生活中心主義。実際の運動理念は、これらの諸概念が補完しあつて構成されているのが普通である。この新教育運動はアメリカでは進歩主義教育と呼ばれ、その教育的価値が最もふさわしいアメリカにおいて発展成長し、全世界の新教育運動をリードすることとなる。もちろんその中心人物はこの小論の主人公であるジョン・デューイである(1)。そしてジョン・デューイの教育思想として自然的経験主義と児童中心主義の2つを紹介している。デューイは教育を生活であり、成長であり、経験の不断の再構成であり、それ自体が社会的過程であると考えてシカゴ実験室学校でチャレンジしたのである。そこでは児童の経験それ自体が教材であり、したがって、学習は「為すことによって学ぶ」のである(2)。また、ジョン・デューイが中心となって進めていった進歩主義教育のメインテーマは児童中心の教育ということである。デューイはこのことをその著書「学校と社会」の中で、天体の中心が地球から太陽に移されたコペルニクスの革命という言葉を使って、これからの教育は子どもが太陽となり、その周囲を教育の諸々のいとなみが回転するという表現を用いて説明している(3)。

これらのデューイの教育思想が前節の「個の確立」教育における目指すべき人間像に関する3つのキー

ワード「自立」「自律」「個の尊重」とどのように関わりがあるか言及してみたい。「自立」とは文字通り自ら立つということである。自ら立つためには自発性や主体的な関わりが求められる。「為すことによって学ぶ」ためには人が自ら進んで為すという自発性や主体的な関わりが大前提となる。他の人から押し付けられた行為はただ行うだけであって、それは経験と呼ぶに値しない。また、児童が中心となるためには児童そのものの存在が他のものから自立して確固たるものであることは当然のことである。社会のためにした方が良くと思うことを積極的に行う「自律」精神はまさに「為すことによって学ぶ」ことを具体化させるものである。ボランティア活動等で他の人から感謝されたりして自信や自己肯定感を持つことそして社会の問題を知って解決しようと動くことは成長を促すきっかけとなる。「個の尊重」は主に児童中心主義に関わることである。そもそもの児童中心主義の発想は児童を教育上の客体と見なすことから脱却し、まずは主体性ある個、人格ある個として認識するところから始まっていると言うことができる。言い換えれば、児童中心主義とは「個の尊重」精神を教育の場で具現化しようとした結果そのものなのである。また、「為すことによって学ぶ」ためには児童が何を為すかの意思が尊重されなければならないという意味でも「個の尊重」が尊ばなければならない。

第3節 総合的な学習

日本版「個の確立」教育として最も注目されるのが総合的な学習であることを先の論文『ジョン・デューイと「個の確立」教育』で指摘したところであるが、その記述によると、「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について」審議した中央教育審議会は、第1次答申「子どもに〈生きる力〉と〈ゆとり〉を」（1996年）のなかで「これからの学校教育においては、これまでの知識を一方向的に教え込む

ことになりがちであった教育から、自ら学び自ら考える教育へと、その基調の転換を図り、子供たちの個性を生かしながら、学び方や問題解決などの能力の育成を重視するとともに、実生活との関連を図った体験的な学習や問題解決的な学習にじっくりとゆとりをもって取り組むことが重要である」という改革構想を提言した。教育の「基調の転換」をはかるというその改革構想は、学校5日制の実施、「総合的な学習の時間」の新設、教育課程の多様化、選択制の拡大といったことで具現化されようとしている（4）。この総合的な学習は試行期間を経て2002年4月より正式な科目として採用された。そして文部科学省はこれまでの取り組みを踏まえて、2008年6月に学習指導要領の見直しを発表した。それによると、総合的な学習の時間においては、従前と同様に体験活動を行うことを重視し、積極的に学習活動に取り入れることとしている。例えば、小学校における自然体験活動や中学校の職場体験活動、高等学校の就職体験活動や奉仕体験活動などである。しかし、体験活動がそれだけで終わるのではなく、体験活動を行うことによって児童の学習を一層充実したものとするのが求められている。そのために、内容の取扱いにおいて、「体験活動については、第1の目標並びに第2の各学校において定める目標及び内容を踏まえ、問題の解決や探究活動の過程に適切に位置付けること」とした。さらに、「問題の解決や探究活動の過程においては、他者と協同して問題を解決しようとする学習活動や、言語により分析し、まとめたり表現したりするなどの学習活動が行われるようにすること」を示した（5）。ここで確認された目標は、「横断的・総合的な学習や探究的な学習を通して、自らの課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育成するとともに、学び方やものの考え方を身に付け、問題の解決や探究活動に主体的、創造的、協同的に取り組む態度を育て、自己の生き方を考え

ることができるようにする」である(6)。まさに「自立」「自律」した「個を尊重」する人間に育てる「個の確立」教育の本質が見事に述べられている文章である。日本の教育がようやくデューイの言うコペルニクス的転換を果たし、「個の確立」教育に目覚めたエポックメイキング的な瞬間とすることができるのではないだろうか。しかもこの総合的な学習の目標がこれから述べられる第2章のサービスラーニングの目標そのものであることに気づき、驚かされている。

第2章 サービスラーニング

第1節 サービスラーニングとは？

北米では19世紀終わりから20世紀前半にかけてジョン・デューイを中心に進歩主義教育が一世を風靡して、「為すことによって学ぶ」経験主義が重んじられたことは前章で述べたとおりであるが、その影響が強くあったこととそれに加えて19世紀後半くらいからアソシエーション革命と呼ばれて今でいうNPOの前身のような自主自立的な組織が多数生まれ、その後のNPO運動の成熟に伴い、生徒の受け皿が充実してきたこともあってサービスラーニングが花開いていくことになる。それではサービスラーニングとは何か。ここでは北米のサービスラーニングの指導者で組織される「教育改革におけるサービスラーニングのための協会（Alliance for Service Learning in Education Reform）」が1993年に発表した定義を紹介したい。それによると「サービスラーニングは、思慮深く組織されたサービスの経験への活動的な参加を通して、若者が学習し成長することを目標に置いた一つの教育方法である。」この定義で注目すべきは、「思慮深く組織されたサービスの経験」という一節である。サービスラーニングはいわゆる体験的な学習として組織されるが、そこではただ体験すればどのような体験でも構わないと考え

ているわけではない。サービスラーニングでは、「若者が学習し成長すること」を第1の目標として、指導者が若者のサービスの経験を「思慮深く組織する」必要がある。上記の協会は「思慮深く組織されたサービスの経験」の内容を次の7つの観点から説明している。

- ①コミュニティのニーズ（コミュニティの実際のニーズに対応していること）
- ②学校とコミュニティの連携（学校とコミュニティの連携の下に組織されていること）
- ③カリキュラムの統合（生徒それぞれの学問的なカリキュラムに統合されていること）
- ④リフレクション（実際のサービス活動の間にしたことや見たことについて考えたり話したり、書いたりする構造化された時間を提供すること）
- ⑤現実生活における知識や技能の使用（コミュニティにおける現実生活の場面において、新しく獲得された学問的な技能や知識を使用する機会を提供すること）
- ⑥学校で教えられたことが高められること（学習の場を教室の外へと拡大することによって、学校で教えられたことが高められること）
- ⑦ケアの感覚（他者へのケアの感覚を育てるのを援助すること）（7）

この7つの観点の中で、学校教育においてサービスラーニングを実施する際に特に重要になるのが④のリフレクションと③のカリキュラム統合である。1996年に発行された「実践者ガイド」によるとリフレクションの性格を“4Cs”という言葉で表現する。つまりリフレクションは「継続的（Continuous）」になされ、学問的な技能や知識と「関連的（Connected）」であり、生徒の考え方や仮説を「吟味する（Challenging）」ものであり、さらに、適切な時に適切なリフレクションの方法が必要であるという意味で「文脈に当て嵌められた（Contextualized）」ものでなければならない（8）。

リフレクションの方法として「理論的学習者」に有効な「読む」,「反省的学習者」「理論的学習者」「実用的学習者」に有効な「書く」,「実用的学習者」に有効な「為す」,「活動的学習者」に有効な「話す」の4つの方法を挙げている。カリキュラム統合については、サービ斯拉ーニングに言及した文献ではほぼ例外なくその重要性が指摘されている。この場合のカリキュラム統合とは、教科を中心とした学問的カリキュラムにサービスを統合する理念及び方法を意味する(9)。平たく言えばある教育目標のためにサービ斯拉ーニングを学問的カリキュラムの中に組み込み、単位を認定するということである。そうすることによってコミュニティのニーズに対応するだけでなく、何よりも大切なことは生徒の学習意欲が高まるというはっきりとした効果があるということである。

最後に北米でサービ斯拉ーニングが盛んに実施されていることについて言及しておかなければならないことがある。北米ではもともとサービ斯拉ーニングが受け入れられやすい土壌があることはすでに述べたとおりであるが、国家政策的視点があることも見逃すことができない事実である。その背景にはコミュニティでの連帯性の衰退が挙げられる。アメリカ政府は国家とコミュニティを活性化させるためには市民一人ひとりのサービス活動に関与する機会を増加させることが必要と考え、1990年に「国家およびコミュニティ・サービス法」を制定した。この法律の制定を契機として学校現場で取り入れられたのがサービ斯拉ーニングである。その後同法に基づき1991年10月には「国家およびコミュニティ・サービスに関する委員会」が組織されて具体的にサービ斯拉ーニングを推進する正式な政府機関ができた。このように政府がそれなりの予算も付けて、先頭に立ってサービ斯拉ーニング実施の環境を整えていったのである。

第2節 NPOの教育力

サービ斯拉ーニングはサービスの経験があって成り立つ教育手法であるが、その受け皿となっているのがNPOである。それはとりもなおさずNPOに教育力があるということを示している。NPOの教育力について佐藤一子氏はNPOが「学習する組織」であることに着目し、次のように言っている。ここでの学習活動は、①ミッションの実現にかかわる価値形成的な側面、②課題解決にかかわる提案・政策提言の内容・方法的側面、③事業の質を支える経営開発的な側面、④社会的サービスとして認知されるための専門性や技術・資格・経験などのキャリア開発的な側面、⑤相互に連携し、情報や課題を共有するコーディネーター的な集団的能力形成の側面など、それぞれのNPOの特性に即して多様な教育・学習的価値の認識と方法・技術の創意工夫をおこなっていることが想定される(9)。

私自身は長年にわたってNPOを運営してきた経験からNPOの教育力について次のように考えたい。まず大前提としてNPO活動は生きるエネルギーを与えてくれる。私たちはNPO活動を通してしばしば感謝されることがあるのではないかと。他者からありがとうと言われることはなんとも言えぬ快感である。この心地よい気持ちを1度味わうと病みつきになると言う人もいる。私はこの気持ちは人間がそもそも持っている本能の1つではないかとさえ思っている。他者から私自身の存在を認められることは社会的な人間にとって生きるうえに必要且つ不可欠なことである。第2にNPO活動は心の教育に効果的である。心の教育とは良い心が引き出されるということである。人間誰しもごくごく当然に自分のことを中心に考えるが、他者のことを心配したり、気にかけてたりすることも多い。自分を中心を考える人が多い社会では争いなどが多くなり、他者のことを考える人が多い社会では争いが少なく、より平和な社会が築かれるのではないだろうか。こうした他者の

ことを心配したり、気かけたりする心を私は良い心と定義しているが、NPOに関わる人々は概してこういう良い心を持っている人が多く、彼らとの接触によって良い心が引き出される可能性が高くなるのである。第3にNPOは人を知るチャンスの場である。私たち人間は誰しも人と出会うことによって成長していくことを経験的に知っているとおり、人間は人の間にあって人間になっていくのである。人間の成長の伸びしろはどれだけたくさんの多種多様な人々に出会っているかに係っているかと言っても過言ではない。NPO活動を通して出会うことのできる人々はハンディキャップを負う人、社会的困難に出会っている人、様々な世代の人、様々な国籍を持つ人など多様である。また、担い手仲間の良い心をもつ人や元気な人との出会いは私たちに積極的な生き方を学ぶチャンスを与えてくれる。最後に組織運営上において得るものも多い。私たちが社会の中で生きていく上に組織というものに関係する機会は多い。組織をうまく活用することができるかどうかは自己実現の度合いに深く関わっている。ボランティアといえどもNPOという組織運営に関わって得ることのできるものは何よりもまずは使命実現に関わる価値の形成である。NPOは社会的使命から始まるからである。次に課題解決に関わる計画実行能力である。NPOは問題解決型の組織であるからである。第3に組織運営に関する経営能力である。NPOは活動を継続するためにその母体である組織を継続させなければならないからである。第4に活動の質を高める専門性である。NPOは活動の成果を出し続けるために常に専門性を追求する必要があるからである。最後に地域の諸資源・人と関わるコーディネート力である。NPOは社会の課題を解決しながら究極的にはそうした問題が起こらないように社会そのものを変革していくよう求められている。そのためには地域にある多くの組織・人々と協力して動くことが必須条件となるからである。

第3節 本学におけるサービslラーニングの取り組み

本学におけるサービslラーニングの取り組みの始まりは2006年度に遡る。その時に存在していた「福祉ボランティア学科」（後に社会福祉学科に合流）の目玉科目「ボランティア活動演習」という科目名のもとに始まり、今日に至っている。当時の『サービslラーニング「ボランティア活動演習」開講のお知らせ』を見ると次のようになっている。

1. サービslラーニングとは

「サービslラーニング」は学生の自発的な意志に基づいて、一定期間社会貢献活動（サービス）を体験することによって、大学等で学んだ知識を実際の体験に応用し、また実際の体験から生きた知識を学ぶ（ラーニング）、いわば社会貢献活動と大学教育を融合させた新しい教育プログラムである。

2. サービslラーニングの特徴

サービslラーニングを有意義に行い、そこから多くのものを学ぶために、事前の準備や学習が大切であるとともに、実際の体験を通じて学んだことを自分の知識として取り込んでいく内省（リフレクション）の過程が組み込まれていることが教育プログラムとしての特徴である。

3. サービslラーニングのねらい

サービslラーニングのプロセスをとおして、教室で与えられる知識では得られないコミュニケーションの力や学際的・総合的な知識と社会に対する責任・見方・判断力などを身につける。

①体験から学ぶ

②現実の問題を解決する必要性を認識する。

③自分が社会に対して何ができるか考える。

④人生の意味を考え社会に対する責任感をもつ。

⑤思いやり、リーダーとしての自覚を身につける。

⑥自分の潜在能力に気づき、引き伸ばす。

4. サービslラーニングの実施方法

本学では、サービslラーニングをシラバス上では「ボランティア活動演習」という科目とし、福祉ボ

ランティア学科3年次に設ける選択科目（通年・4単位）とするが、全学の学生が履修可能な共通専門科目とする。

(1) 事前学習

社会貢献活動を開始するにあたり、ボランティア活動に関する基礎知識、様々な活動領域や課題などを学ぶ。そこから各自、自分の活動目標を設定し、活動計画をたてる。

(2) 社会貢献活動

活動期間は、実働90時間以上とする。

活動先は、次の2領域に大別する。

①国際協力ラーニング（活動先はAMDA等のNGO。ただし国内における活動とする。）

②コミュニティサービスラーニング（例：手作り遊び教室、ノートテイク、ボランティアセンター、NPOセンター、吉備ガーディアンズ等）

活動先は上記の他各自が選択することができる。ただし、活動先に各自の活動を評価してもらえる指導者がいること。

(3) 事後学習（リフレクション）

社会貢献活動での反省や学びを教室での討議をととして共有する。また、報告書を作成し、報告会によって学びを発表する。

5. 指導と評価

サービスラーニングの指導は福祉ボランティア学科教員が当たる。評価は、活動受け入れ先による評価、自己評価を総合して、担当教員が評価する。

以上のような「開講のお知らせ」のもとに始まって、現在で7年目を迎えている。今年度も含めると今までに121名の学生が受講し、それぞれに成果を上げている。報告書や発表会からの受講学生の声を一部拾い挙げて紹介したいと思う。

・ボランティア活動をするにあたって、いつも何気なくしているあいさつがボランティアと参加者、利用者、受け入れ側のスタッフを繋いでく

れる大きな役割を果たしていることに気づいた。

- ・ボランティアという立場であれ、「教えていただく」「～させていただく」「一緒に楽しむ」という姿勢で臨むことが大切だと学んだ。
- ・ボランティア活動は人と人とを繋ぐ架け橋のような役割をしていることが分かった。
- ・ボランティア活動に参加させてもらい、自分自身が成長できたのではないかと喜んでいる。例えば人と関わるのが嫌いでなくなったこと、子どもとの接し方が少しは分かるようになったこと、学ぶこと・経験することが楽しいことそして大切なことだと思えるようになったこと、NPO法人に興味を持つようになったこと、これからもっとボランティア活動をしてみたいと思うようになったことなどである。
- ・ボランティア活動を通して自分を変えることができるという経験を持つことができて、本当に良かった。
- ・子どもたちや利用者さんには自分から積極的に声掛けをしないとコミュニケーションを取ることができないことが分かった。
- ・ボランティア活動においては人と人との関係性が強く、語る場面が多かったので、ごく自然にコミュニケーション能力を高めることができた。
- ・ボランティア活動をしながら、自分の得意分野や好きなことまた苦手なことが見えてきて自分自身を見つめなおすきっかけとなった。
- ・ボランティア活動を通して人の温かさを感じることができた。また、お互いが助け合う相互扶助精神の大切さを知ることができた。

第3章 まとめ―「個の確立」教育を推進するサービスラーニング―

社会貢献活動（サービス）を体験することによって学習する（ラーニング）サービスラーニングは自

ら進んで主体的に活動に参加することが大前提である。そうすることによってジョン・デューイいわく「為すことによって学ぶ」ことができるのである。この学びを通して「個の確立」が進むことを明らかにすることによってまとめにしたいと思う。「個の確立」における第1の要素である「自立」については特に精神的自立に注目したい。社会貢献活動を「自ら進んで主体的に行う」ということが重要である。「自ら進んで主体的に行う」ということは即ちその結果責任は自らのみが担うということであり、それゆえ判断の1つ1つが他の誰にも頼ることなく、自らの決断によってなされるということである。こうした活動の繰り返しは自らの行動を厳しく見つめる機会となり、その結果自立を促すことになることを確信している。次に「個の確立」における第2の要素である「自律」について考えてみたい。この小論第1章第1節にも述べているが、積極的な「自律」に注目したい。良いと思ったことを進んでやろうとする心構えのことである。社会貢献活動に参加したいという動機は多くの場合社会のために何か役に立ちたいという素朴な人間の本能である。しかし人は様々な事情でそうした活動に参加できないあるいはしないケースが圧倒的に多い。本能が揺さぶられる機会が少ないからである。サービスマーケティングは良いことをしたい、しなければならぬと思う機会を提供し、そうした良い経験を通して良いと思ったことをもっともっとやってみたいと思うような気持ちを育てることができると確信している。最後に「個の確立」における第3の要素である「個の尊重」について考えてみたい。まず自分という個が尊重される体験は貴重である。感謝されたり、存在が認められたりすることは生きるエネルギーとなる。社会に必要とされる社会貢献活動ではそうした機会が多々ある。学生たちが社会のために役に立っているという実感を得て、自分自身に自信を持つ場面でもある。他の人の個を尊重することが大切であると思う機会

も多い。そもそも社会貢献活動の多くが支援を必要としている人々に支援の手を差し伸べることであるから、他者の気持ちに寄り添っているものであるが、サービスマーケティングはそうした人々の気持ちを更に知る機会ともなって、「個の尊重」が促進されると確信している。

おわりに

1972年4月に財団法人神戸YMCAに就職し、少年事業に出会い、1977年に提出した主事論文「日本YMCA少年事業史」を執筆する中で日本のYMCA少年事業に多大な影響を与えた北米YMCA少年事業に出会い、その北米YMCA少年事業の理論的支柱となっていたジョン・デューイの教育理論の学びを通して、「個の確立」に興味を持ってから35年が経った。2005年4月から吉備国際大学で教鞭をとりながら、ほぼ1年に1本のペースで「個の確立」に関する小論を書き続けて7作目、今その最終章を書き終えて更なる飛躍を願っているところである。

第2次世界大戦後しばらくの間東西両陣営の冷たい戦争期間があったものの1989年のベルリンの壁の崩壊を契機として世界各国の社会体制は概ね民主主義体制が定着しつつあると言っても過言ではない。現状では民主主義体制を上回る善き社会体制を見出すことができないからである。ところがこの民主主義体制にも大きな落とし穴があることを見過ごしてはいけぬ。いわゆる衆愚政治とかポピュリズムとか言われた言葉にあるように、民主主義が悪用される恐れが常に存在しているからである。現状で最も善しとされる民主主義体制を善い状態に保つために必要なことが「個の確立」であると私は確信している。個の思いを尊重できる自立・自律した人間がいることによってはじめて多数決原理を柱とする民主主義体制がその機能を十分に果たすことができることに思いを馳せたい。特に失われた10年とも20年と

も言われる歴史的な転換期に立っている日本の国に ばと願ってやまない。
あって私たちが目指すべき人間像の一考にでもなれ

引用文献

- (1) 米良重徳 (2010)『ジョン・デューイと「個の確立」』 吉備国際大学研究紀要 (社会福祉学部) 第20号 pp.33
- (2) 米良重徳 (2010)『ジョン・デューイと「個の確立」』 吉備国際大学研究紀要 (社会福祉学部) 第20号 pp.36
- (3) 米良重徳 (2010)『ジョン・デューイと「個の確立」』 吉備国際大学研究紀要 (社会福祉学部) 第20号 pp.36
- (4) 米良重徳 (2010)『ジョン・デューイと「個の確立」』 吉備国際大学研究紀要 (社会福祉学部) 第20号 pp.38
- (5) 文部科学省 (2008)「小学校学習指導要領解説—総合的な学習の時間編—」 pp.11
- (6) 文部科学省 (2008)「小学校学習指導要領解説—総合的な学習の時間編—」 pp.13
- (7) 唐木清志 (2010)「アメリカ公民教育におけるサービス・ラーニング」初版 東信堂 東京 pp.146 ~ 147
- (8) 唐木清志 (2010)「アメリカ公民教育におけるサービス・ラーニング」初版 東信堂 東京 pp.208
- (9) 佐藤一子 (2004)「NPOの教育力」初版 東京大学出版会 東京 pp.6